

村上 薫

本作品は、二〇一二年八月までに一四版を重ねたロングセラーで、演劇化もされた。奥付によれば、著者のハティジェ・メリエムは一九六八年イスタンブル生まれ。ドグズ・エイリユル大学財政学を卒業後、三年間の銀行勤務の後、一九九四年にロンドンに渡り、清掃、ベビシッター、アイロンかけ、新聞配達などさまざまな仕事に就いた。一九九六〜二〇〇一年に『オキユズ（雄牛）』誌の編集にたずさわり、一九九九年に『ヴァルルック（存在）』誌主催コンテストの掌編部門で「初売り（Siftah）」が注目を浴びた。主な作品に『十人十色（İnsan Kısım Kısım Yer Damar Damar）』（二〇〇八年）、『私の頭の中の蛇（Akımdaki Yılan）』（二〇一〇年）などがある。写真家の顔もつ。

本作品は、数行から十頁程度の掌編三十編からなる。掌編（オイクュ öykü）とは、日本文学の短篇に似ているが、トルコ語では「詩の姉妹」と形容され、トルコ人の感覚では小説より詩に近い（大島史「作家と語る現代トルコ文学——オヤ・バイダルとその作

品」『現代の中東』第三十七号、二〇〇四年）。タイトルは、女性にとって結婚することの大切さを説く慣用語、「蚊ほどの亭主でいいから、いてくれないと」からとられている。語り手が三〇人の「女房」について、「もし私が〇〇の女房だったら」という仮定法で語るという形式で、登場するのは社会階層的には「中の下」に属す、さまざまな職業、年齢、性格の男たちの女房たちである。

酔っ払いの女房、アパートの門番の女房、旋盤工の女房、こびとの女房、イマームの女房、配達夫の女房、家具職人の女房、看守の女房、肉屋の女房、若い男の女房、繊細な男の女房、労働者の女房、怠け者の女房、男の二番目の女房、鉄道員の女房、商人の女房、小心者の女房、年金生活者の女房、大食いの女房、無用な男の女房、ジプシ―男の女房、初恋の相手の女房、サズ詩人の女房、運命の犠牲者の女房、美男の女房、詩人の女房、老人の女房、困窮した男の女房、父の女房、息子の女房。

トルコ語で「配偶者」を指す言葉はいくつかあるが、この作品に登場するのは *karı*（女房、かみさん）と *koca*（亭主、だんな、うちの人）である。対等な関係性の語感があり、公的な場面で使われる *öz*（妻、夫）にたいし、*karı* と *koca* は口語的で、夫婦の役割や相補う関係性を意味として含んだ言葉といえる。ミドルクラスが *öz* を好んで使うのにたいし、*karı/koca* はより下の階層のあいだで使われる。

そのような「女房」たちをとりあげることにについて、著者はインタビューに次のように答えている。

—— 有名人や富裕層、エリートが登場しないのはなぜでしょうか？

「それは、そうした人たちの女房たちは典型的な意味での『女房』ではないからです。彼女たちに女房ではなく妻（*öz*）です。妻たちは出口をたくさん持っています。人生のドラマや苦労や不安に名前をつけることができるし、本や心理療法士、瞑想サロンなど、安らぎを与えてくれる最新の方法も利用できます。でも下層出身の女性はたいてい、自分たちの貧困や窮乏に名前をつけることもできない。

彼女たちは印象に基づく判断や直感で解決するしかないので。マハッレのなかで、編み物を手にガムをかみながら戸口の前に座り込み、コンロにかけた夕飯のおかずのことで頭はいっぱいです。そんな彼女たちは互いに連帯感に満ちた会話をします。連帯感に満ちた、文字では書かれていない本のなかの文章を語るのです。夕方、亭主たちが疲れて帰ってくるとか夜間シフトがあるのに雨のせいでパンツが乾かなかったとか。そういったたぐいの苦労や解決策が書かれた分厚い本の文章です。この文章は、目がくらむほど輝いていることもあるし、陰鬱だったり、恐ろしいほど現実的だったり、あるいは繰り返しばかりで退屈なこともあります。貧乏人のドラマは、だからとても豊かなのです」。(後略)

——でも女性たちがそんなふうに考えていたら、家父長制的な社会は変化しないのではありませんか？

「彼女たちは人生の三分の一を『蚊ほどの亭主でもいいから……』と聞かされ結婚の準備をしながら過ごします。結婚の準備期間は、緊張や疲労がつきものです。計画や戦略、防衛、投資も必要とさ

れます。この本に登場する女性の多くはこの準備期間を「優」で終えた人々です。彼女たちは家父長制的な秩序のなかでやっていくために、この戦略にわらにもすがる気持ちでしがみついたのです。この戦略が救済の手段のように見えることこそが、家父長制的秩序を強化する要因のひとつだと思います」。

(二〇〇二年一月三日付け *Radikal* 紙)

この作品が人気を博した理由のひとつは、軽妙な語り口とユーモアとともに、自分の感情や経験を公的な場で語ったり文章にしたりすることのできない女性たちの世界を描き出したことにある。著者が語るように、作品に登場する三十人の女房たちは、「〇〇の女房」として、夫を通じてしかアイデンティティを持たない女性であり、家父長制の犠牲者といえる。だが同時に、抑圧や窮乏に抵抗し日常を生き延びるたくましさも持ち合わせている。そんな三十人の女房たちについて想像をめぐらせたあと、著者は誰の女房でもない語り手に、独りであることの代償の大きさ、それでも生きていこうという希望を語らせている。「蚊ほどでいいから」亭主がいてこそその女、という「女房

亭主的秩序」のもとでは、結婚していてもいなくても、それぞれに悲しみや苦しみ、そして希望があるということだろうか。

今回訳したのは、第一話「酔っぱらいの女房」、第二話「アパートの門番の女房」、第七話「家具職人の女房」、第二十四話「運命の犠牲者の女房」、第二十五話「美男の女房」、第三十話「息子の女房」、および語り手によるエピローグである。